

## イギリス国教会の成立

- 1) イギリスでは薔薇戦争を経て【1: 】が成立した。国王【2: 】位1509-47は、当初ルターの宗教改革に反対したが、ローマ教会と対立し宗教改革を断行した。王妃カザリン（スペイン王家出身）との離婚を教皇が認めなかったためローマ教会から離反したとされているが、本質的にはローマ教皇の権威から独立するためである。
- 2) 1534年、ヘンリ8世は議会の支持のもとに、国王自らが宗教的にも最高権威になるという【3: 】（首長法）を制定し、ローマ教会からの分離独立が確定した！まだ不安定ながら【4: 】の基礎をつくった。エリザベス1世 位1558-1603 再度【3】を制定している  
「第一次困い込み」を著書『ユートピア』で「羊が人間を喰い殺す」と批判したトマス=モアは、カトリック信徒の立場からヘンリ8世の離婚に反対して、反逆罪で処刑された。
- 3) 国王は自らの宗教改革で存在意義の薄くなった修道院を解散させ、その膨大な土地財産を地主の【5: 】（貴族ではない地主）に払い下げた。また、ローマ教皇庁に納められていた「十分の一税」も国王の収入とし、王室の財政基盤を固めた。  
ジェントリたちは、払い下げられた土地を手に入れて勢力を伸ばした。彼らの所有する土地は国土の25%から50%に増加し、無給の治安判事として裁判と地方行政を担当し、16世紀以降のイギリスの支配階級を形成した。だから、絶対王政の象徴の一つである官僚組織はイギリスでは典型的には発達しなかった。彼らは、「本物の貴族」（ジェントリは身分的には平民）たちとともに【6: 】を形成し、16世紀以降のイギリス社会のリーダーシップをとった。彼らは19世紀半ば以降は証券投資などを行って生活した。「本物の貴族」の末裔は映画『タイタニック』（1997アメリカ）にも描かれている。架空の人物であるが、コナン Doyle 1859-1930 描くシャーロック=ホームズとワトソンはおそらくジェントリ出身であろう。  
一方、ヘンリ8世時代には、フランドル地方の毛織物業の急速な発展でアントウェルペン向けの羊毛輸出が急増した。一般農民は牧羊地確保のための共有地困い込みである【7: 】で土地を失い、社会不安を招いた。この時期、イギリス国内でも毛織物マニュファクチュアが無数に生まれ、毛織物業はイギリスの国民的産業となった。
- 4) 6度も結婚したヘンリー8世のただ一人の男子、【8: 】位1547-53の治世に、教義面での改革が進み、新教に基づいて「一般祈祷書」が作成され、イギリス国教会の礼拝様式が定められた。ヘンリー8世と2番目の妃アン=ブーリンとの間の娘が後のエリザベス1世で、母が異なる【8】の姉である。アン=ブーリンはエリザベス1世が2歳半の時に処刑され、エリザベス1世自身も、イギリスを一時的にカトリックに復帰させた先代のメアリ1世 位1553-58 在位中は反乱を企てた疑いで投獄されている。
- 5) 女王【9: 】位1553-58はカトリック教国スペインの王子フェリペ（後のフェリペ2世）と結婚(1554-58)し、イギリスは一時カトリックに復帰した。
- 6) テューダー朝最後の国王、【10: 】位1558-1603は、即位の翌年の1559年に父のヘンリ8世が制定した首長法（国王至上法）を再度制定し、更に同年、第3回【11: 】（信仰統一法）を制定し、メアリ1世のカトリック復帰による混乱を收拾し、国教会を再興した。これをもってイギリスの宗教改革の完了、**イギリス国教会の確立**とする。  
【11】は1549年（エドワード6世時代）から計4回制定されたが、第3回（1559）が最重要。  
エリザベス1世（女王）は、プロテスタントの教えを部分的に受け入れ、教義はほぼカルヴァン主義を採用したが、司教（主教）制を維持するなど教会組織や儀式はカトリックにかなり近いものを採用し、聖職者が祈祷や聖礼典を執行する際はエドワード6世が1552年に改定した一般祈祷書を用いるべきことを定めた。カトリック色を残したイギリス国教会の教義の純粋化を求め、改革の徹底を内部から求め続けた人々は**ピューリタン**と呼ばれた。ピルグリム=ファーザーズ（1620年プリマスに渡る）はピューリタンである。女王は、**カトリックやピューリタンを弾圧**して国教会の確立をはかった。  
エリザベス1世は羊毛生産や毛織物業などを保護し、ホーキンスやドレークに私掠しりゃく特許状を与えて、商船や「銀艦隊」を組んで銀を輸送するスペイン船を襲撃し積荷を奪わせた。私拿捕しただけ船とも言う。国家公認どころか国王の傭兵ともいうべき海賊である。オランダの独立を支援したために、強国スペインの無敵艦隊（アルマダ）が1588年にイギリスに来襲したが、私掠船を大きな戦力とするイギリス海軍はこれを撃退した。
- 7) もっと徹底した改革を求める人々はピューリタンと呼ばれる。国教会はピューリタンからもカトリックからも攻撃された。しかし、国教会の確立はローマ教皇やスペインの干渉を排除し、イギリスが主権国家として確立する契機となった。

## 対抗宗教改革

- 1) カトリックも巻き返しをはかった！カトリック側の、腐敗を改め教勢を盛り返す動きを【12: 】（あるいは反宗教改革）とよぶ。教皇パウルス3世 位1534-49 09Wは、【13: 】（あるいはトレント公会議）を開催し、それは断続的に1545年から63年まで続き（閉会時はピウス4世）、カール5世も関わった。公会議の当初の目的は新旧両派の調停であったが、**新教側が出席を拒否**したために旧教側だけの会議になった。この公会議は、次のようなことを決めた。※
  - ①内部改革…これらが改革と言えるかどうかは別として、近代カトリックの教義を確立したことは確か！
    - ・教皇至上権の確認
    - ・宗教裁判所を設置（異端審問の強化）
    - ・禁書目録制定による新教弾圧
    - ・各国支配者層への働きかけ
    - ・海外伝道の強化
  - ②新教地域の奪還
  - ③海外布教

※トリエント公会議といえば、**シュマルカルデン戦争**である。シュマルカルデン戦争 1546-47年 とは、シュマルカルデ

ン同盟(1530年結成)に属する諸侯・都市がトリエント公会議に抗議して神聖ローマ皇帝カール5世の率いる皇帝側と戦った戦争である。《ドイツ農民戦争の終結(1525)からアウクスブルクの宗教和議(1555)までの約30年間行われた名前のない内戦》の一部を構成するが、同盟の内部分裂で敗れ、同盟は解体された。

2) カトリックとプロテスタントの対立は、国内でも、国家間でも激しい対立を生み、**16~17世紀のヨーロッパは「宗教戦争の世紀」となった**。戦争の原因は必ずしも宗教ではなかったが、カトリック教会は、17世紀半ばには、**南ドイツ、ポーランド、オーストリア、フランス、ネーデルラントの南半分を取り戻した**。

3) 「【14: 】」は古くから行われたが、宗教改革期以降は組織的・計画的に行われた。カトリックとプロテスタントの対立が激化した16~17世紀は、実は「【14】」が最も盛んに行われた時期である。17世紀は「危機の世紀」といわれ、戦争、革命、疫病、飢餓などで人々が不安の中に暮らしていた時代だった。カトリック、プロテスタントを問わず、ドイツ、イギリス、オランダ、そして大西洋を越えてアメリカでも「【14】」は行われた。

12世紀のカタリ派の弾圧やテンプル騎士団への迫害以降に、ローマ教皇庁の主導によって異端審問が活発化した。それに伴って《教会の主導による魔女狩りが盛んに行われるようになり、数百万人が犠牲になった》と語られることが多かったが、このような認識は誤りである。**魔女狩りは民衆法廷という形で魔女を断罪する仕組みがつくられ、民衆の手で行われた**。カトリック教会は異端の追及は行っているが、魔女裁判には関与しなかった。15世紀に入ると異端審問所に魔女嫌疑が持ち込まれたが、異端審問所ではこれを裁くことはできないという判断が出されている。異端はキリスト教徒でありながら、誤っているとされた信仰を持っている者であるのに対し、魔女はそもそもキリストを信じないとされる人々であるためである。

4) ラテンアメリカやアジアにカトリックが広まったのはなぜ？

世界を分割する勢いのスペイン、ポルトガルの海外進出に伴って、カトリック勢力が多くの宣教師を海外に送り出したから。スペイン、ポルトガルの支配が広まった地域はカトリックが布教された。例えば、1549年、イエズス会(後述)創設メンバーの一人【15: 】1506?-52 Francisco Xavier は日本に到達した。後掲「参考1」参照。明・清代の中国宮廷に仕え、西欧科学技術を伝えた宣教師もいる。ラテンアメリカでは、先住の人々の民俗、社会についての貴重な資料を残した。

5) スペイン出身の貴族、【16: 】1491?-1556 Ignacio Loyola は軍人だったが1521年負傷を機に回心、神学校に入学、1534年、パリでフランシスコ=ザビエルら6人の同志とともに、清貧・貞潔・教皇への絶対服従を誓う組織である【17: 】を結成した。1540年、**教皇パウルス3世**(位1534-49 トリエント公会議の主催者)の認可を受け、初代総長となった。イエズス会は対抗宗教改革を推進する上で大きな役割を果たした。スペインの海外進出に従って海外、特にアジアに布教した。しかしローマ教皇に忠誠を誓うイエズス会はヨーロッパの王権(主権国家)とも対立するようになり、各国が弾圧したり教皇に圧力をかけたため、1773年教皇の命令で解散したが、まもなく再興され今日も存在する。なお、海外への伝道に活躍したのはイエズス会だけではなかった。後掲「参考2」参照。危険を承知で海外布教を行う伝統はその後カトリックに受け継がれた。後掲「参考3」参照。

6) 神聖ローマ皇帝は1648年(ウェストファリア条約)以降有名無実化し、ローマ教皇の権威も14世紀以降衰微した。**国境を超えて全ヨーロッパに君臨する力や権威が何も存在しない**という新しい局面の下で、主権国家が成長、台頭してきた。16~17世紀は、無数の主権国家が誰からも掣肘を受けず、自国の利益のみを追求して意志決定し、必要なら戦争に訴えるという恐ろしい時代の幕開きであると同時に、人民自身が何も恐れず何にも束縛されずに、自分自身の信仰と向き合うことができる時代を迎えた。

参考1 日本で布教にあたった後、中国布教の旅に出て病死したザビエルの遺体は主に3カ所に保存されている。

右腕の肘から手先までは、イエズス会の総本山ローマ・ジェズ教会、右腕の肩から肘までは、中国マカオの聖ヨセフ教会に保管され、腐っていないという。ミイラ化した本体はインド、ゴアのボン・ジェズ教会に安置されている。

参考2 海外布教にあたったカトリック宣教師はイエズス会だけではなかった。

**日本二十六聖人**とは豊臣秀吉の命令によって長崎で処刑された26人のカトリック信徒のことである。豊臣秀吉の禁教令により京都や大坂でとらえられた外国人宣教師6人と12~14歳の子ども3人を含む日本人20名は長崎に送られ、慶長元年(グレゴリオ暦1597年)に、長崎西坂の地で処刑された。**フランシスコ会員7名、信徒14名、イエズス会関係者3名**の合計24名に、道中でイエズス会員の世話をしよう依頼され付き添っていた1名と、同じくフランシスコ会員の世話をしていた1名も捕縛され合計26人。通常の刑場でなく、長崎の西坂の丘の上で処刑されることが決まると、長崎市は混乱を避けるため外出禁止令が出されていたが、4000人を超える群集が集まってきていた。パウロ三木は死を目前にして群集に自分の信仰を語った。一行は槍に両脇を刺しぬかれて殉教した。26人は1862年、ローマ教皇ピウス9世によって列聖され、聖人の列に加えられた。1962年には列聖100年を記念して西坂の丘に日本二十六聖人記念館(今井兼次氏の設計)と彫刻家の舟越保武氏による記念碑が建てられた。JR長崎駅を見下ろす丘の中腹にあり、修学旅行の代表的見学地の一つになっている。

参考3 アウシュヴィッツ強制収容所で殉教したコルベ神父も、イエズス会ではないが、どんな危険も承知で海外布教するカトリックの精神を体現している。「聖母の騎士」修道院の**コルベ神父**は、資金も乏しく日本語も充分でない中、**長崎で1930年から6年間伝道**した。1936年(昭和11年)にポーランドに帰国。ナチに批判的なコルベは、1941年に捕らえられ、アウシュヴィッツ強制収容所に送られた。ここでは脱走者が1人出るたびに無作為に選ばれる10人が餓死刑に処せられたが、7月末の脱走で、10人の1人に選ばれたフランツィシェク=ガヨウィニチェクというポーランド人軍曹が「私には妻子がいる」と叫びだした。コルベは「私が彼の身代わりになります」と申し出た。餓死刑の死刑囚たちは飢えと渇きによって錯乱状態で死ぬのが普通であったが、コルベと囚人9人は互いに励ましあいながら静かに死んでいったといわれ、牢内から聞こえる祈りと歌声によって餓死室はまるで聖堂のようだった。命を助けられたガヨウィニチェクは戦後、生涯にわたって世界各地で講演を続けた。長崎のコルベ神父の資料館は大浦天主堂直下の正面向かって右手に入る狭い路地(グラバー邸への近道)に、土産物屋に混じってひっそりと建っている。修学旅行生も、よほど丁寧な事前指導を受けた学校以外は訪れることはない。